

『季刊三千里』が語る日本人の朝鮮蔑視観^{*}

－日帝強占期に創造された「停滞論」を基に－

朴正義^{**}
kannan322@hotmail.com

<目次>

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 3. 日帝強占期の朝鮮「停滞論」創造 |
| 2. 日帝強占期の朝鮮「停滞論」に基づく朝鮮蔑視感 | 3.1 「征韓」の理論としての「停滞論」 |
| 2.1 新渡戸稲造 | 3.2 「停滞論」の理論化 |
| 2.2 福沢諭吉 | 4. 敗戦後も受け継がれた朝鮮「停滞論」 |
| 2.3 与謝野鉄幹 | 5. おわりに |

主題語: 季刊三千里(The Quarterly Sanzenri)、停滞論(Stagnation theory)、在日(Korean residing in Japan)、朝鮮蔑視感(a feeling of Korea slight)、脱亜論(Datsu-A Ron)

1. はじめに

過去において日本で、組織の機関紙でなく、純粹に民間の在日韓国・朝鮮人(ここでは、ニューカマー¹⁾を除外したオールドカマー²⁾だけを意味し、以後在日と略す)によって創刊された一般雑誌『季刊三千里』があった。1975年2月創刊、13年間続き、1987年5月巻50号で終刊した。編集委員の姜在彦、金達寿、金石範、李進熙、そして若き日の姜尚中氏などなど、当時の在日を代表する知識人を総動員する形で執筆が行われた。さらに、在日だけでなく当時の日本の著名人、司馬遼太郎、上田正昭、大江健三郎などなど挙げれば限がなく、多くの日本人に在日・韓半島を語らせている。日本人に、韓半島を考えさせ、在日問題

* 이 논문은 2016년도 원광대학교 교내연구비로 연구함

** 圓光大學校 日語教育科 教授

1) 日本が戦後の高度経済成長期を終え、先進国に仲間入りした1980年以降の日本へ渡ってきた人たちをニューカマーと呼んでいる。

2) オールドカマーとは特別永住権者を示す。元々戦前から日本に住み過去には日本国籍を有する者であったが、1951年のサンフランシスコ条約調印(1952年発効)によって日本の主権が回復されると同時に一方的に日本国籍を剥奪された者と、その子孫である。

だけでなく韓半島統一をも日本人自らの問題として捉えさせた功績は大であった。そして、当時、日本の多くの大学において副教材として採用もされていた。そこには、韓半島に関する文化・歴史・政治・経済・社会など全てを網羅した記事・論文・資料が大量に蓄積されており、さらに、在日問題だけでなく韓日間における多くの問題が提起されてきた。今も、『季刊三千里』は在日・韓日問題を考えるにおいて、まさに宝庫とも言えるものである。

しかし、残念ながら、『季刊三千里』で提起された多くの問題は未解決のまま今も残されている。さらに、日本政府の同化政策により在日は風化の一途をたどり、在日に関する研究も減少する傾向にある。そして、日本における韓国人問題は、今やニューカマーに集中している。³⁾と云って、在日問題が終わった訳ではない。ニューカマーの問題は日本の高度成長期以降の移住外国人問題であり、そこには日帝強占期そしてそれを引き摺る韓日間の歴史問題は含まれていない。⁴⁾それに対し、「在特会」⁵⁾の差別行動に見られるように、在日は、今も差別の対象として存在しており、今も日帝強占期の中に生きていと言っても過言ではないだろう。⁶⁾即ち、在日問題は日帝強占期、そして、それを今も引き摺る韓日間の問題である。この在日問題は、正しい韓日関係を築くに置いて避けられない問題であり、ここに在日問題の宝庫とも言える『季刊三千里』を研究する価値があるといえる。

『季刊三千里』は、「創刊のことば」⁷⁾に記されているように、大きく「韓半島の統一」と「朝鮮⁸⁾と日本の相互理解」の二つの目的をもって創刊された。「韓半島の統一」問題に関しては、既に拙論『『季刊三千里』の立場(1)―総連との決別―』(『日本文化学報』第48輯)・『季刊三

3) 朴正義(2014)『大久保コリアタウンの人たち』国書刊行会、p.12

4) 韓国からのニューカマーも韓日歴史問題に対しては関心を示すが、オールドカマーの歴史を継承していない。(朴正義(2014.10)『大久保コリアタウンの人たち』国書刊行会、pp.20-27)

5) 在日特権を許さない市民の会は、在特会(ざいとくかい)と略される。在日韓国・朝鮮人が保持しているとされる「在日特権」を無くし、普通の外国人と同等の待遇に戻すことを綱領としている民族主義・排外主義的主張に基づき活動する極右派系市民グループの一つである。しかし、在日には「在特会」が批判する「在日特権」とは、植民地化の結果、日本人として日本に住み着き、戦後一方的に日本国籍を奪われ外国人となった在日に与えられた資格といえ、特権と言えるものではない。団体の主な活動は、朝鮮・韓国人に対するヘイストスピーチを伴ったデモである。彼らが主張する「特権」のない韓国人ニューカマーも攻撃対象であり、単なる「反朝鮮・韓国」団体と言っても差し支えないであろう。最近では、韓国人だけでなく中国人やその他在日外国人、さらには同胞であるはずの日系ブラジル人にも向けられている。(安田浩一(2012)『ネットと愛国』講談社)

6) 前掲書、朴正義(2014)、pp.20-21

7) 三千里編集委員会編(1975)『季刊 三千里』創刊号、三千里社、p.11

8) 『季刊三千里』当時において、韓半島全体を示すとき「朝鮮」と言う語を一般的に使用していた。特に、日帝強占期の話である場合は「朝鮮」という語が使用されていた。ただ現在の在日を示す時、「韓国・朝鮮」と併記した。また、区別して大韓民国は「韓国」、北韓は「北朝鮮」と表記した。

千里』の立場(2)一金日成主義批判による北韓との決別-」(『日本文化学報』第50輯)・「『季刊三千里』と韓国民主化-日本人に知らせる」(『日本文化学報』第54輯)・「『季刊三千里』の統一論-南の民主化から考える-」(『日本文化学報』第57輯)において述べさせていただいた。しかし、既に三・四世が主流を占める現在の在日にとって、「統一問題」は直接的な問題ではなく二次的な問題でしかない。

もう一つの目的「朝鮮と日本の相互理解」、これは既成事実化している在日の「日本定着」に関する直接的な問題で、現在の在日の本質的な問題と言える。これに関しては、拙論「『季刊三千里』が語る在日の日本定住-日本国籍否定から定住外国人-」(『日本文化学報』第62輯)において述べさせていただいた。『季刊三千里』は、在日が自分自身に誇りを持って暮すためには、民族の主体性を持って外国人として暮すことである、と結論づけた。⁹⁾しかし、日本人の朝鮮人蔑視意識がなくなる限り、民族の主体性を持ち得ても、在日は日本において幸福には暮せない。「これを成し遂げるためには、日本人に韓国・朝鮮人を正しく理解させることに努めなければならない」が、『季刊三千里』が存在しなければならない究極的な目的であった。

『季刊三千里』(4号)に載せられている当時東京都立大学助教授であった小沢有作氏の「日本人の朝鮮観」の一部を紹介すれば、以下の通りである。

日本における朝鮮・朝鮮人の像の根幹には、今なお、朝鮮植民地下の時代につくられたそれが活き続けている、と思う。朝鮮に対する同化と排除の政策思想は、在日朝鮮人にたいする日本社会の日常意識と化し、今やそのまま日本人総体の骨がらみの思想になっている。¹⁰⁾

日本人の朝鮮観をみるさい、はなばなしき言論の遊泳に焦点をあてるだけでなく、侵略者のために作為した朝鮮観が民衆の朝鮮観としてすでに自然意識化しきっているということ、ために日本人が上下に割った人間関係を朝鮮人ともちつづけている。¹¹⁾

当時いや現在の日本人の「朝鮮観」を端的に表している、と言える。日帝強占期の日本政府は大韓帝国を併合すると同時に、日本人に朝鮮意識を歪めて伝え、日本人の朝鮮蔑視意識を創造してきた。現在も日本人の中に深く宿っている韓国・韓国人に対する蔑視感情がそ

9) 朴正義(2014)「『季刊三千里』が語る在日の日本定住-日本国籍否定から定住外国人-」『日本文化学報』62輯、韓国日本文化学会

10) 小沢有作(1975)「日本人の朝鮮観」『季刊三千里』4号、三千里社、p.36

11) 上掲書、p.39

うである。

今回は、日帝強占期の日本の知識人が何を根拠として朝鮮蔑視感情を持ったのか、さらに、蔑視感情を創造したプロセス、最後にそれが現在も生き続けていることを、『季刊三千里』を通して見ることにする。

2. 日帝強占期の朝鮮「停滞論」に基づく朝鮮蔑視感

『季刊三千里』は、創刊号から多くの紙面を裂き日本人の朝鮮観を掲載し続けてきた。ここでは紙面の都合上、今も日本人に大きな影響を与えている教育者であった新渡戸稲造、思想家の福沢諭吉、文学者の与謝野鉄幹の三人を代表として挙げて、日帝強占期の日本の知識人が何を根拠として朝鮮の植民地化を合理化した要因が何であったか、さらにそれが日本人大衆に如何に朝鮮人蔑視感情を持たせたを、『季刊三千里』は追求した。

2.1 新渡戸稲造

『武士道』の著者として世界的に広く知られている新渡戸稲造は、彼の言葉「私は太平洋の橋になりたい」¹²⁾でみられるように、国際主義を標榜する教育者であった。また、植民地時代の朝鮮における逸話「朝鮮人を蔑視した車夫を突き飛ばした話」¹³⁾は有名で、新渡戸自らが「朝鮮の友」と言ってはばからないほど、朝鮮民族に対して深い愛情をもった人物であったと伝えられている。

当時北海道大学助教授であった田中慎一氏は、『季刊三千里』(34号)「新渡戸稲造と朝鮮」で、新渡戸が一高校校長時代に朝鮮併合を踏まえて、1910年9月13日入学式に行った「校長演説」¹⁴⁾を挙げ、

12) 岩波講座(1993)『近代日本と植民地4 統合と支配の理論』岩波書店、p.179

13) かつて新渡戸が人力車に乗っていた時、日本人車夫が余りにも朝鮮民族に対して侮辱的な言動をするので、車から飛び降りて車夫を突き飛ばしたことがあったという。(上掲書、p.191)

14) (略)忘れることの出来ないのは朝鮮の併合の事である。(略)我が国は一躍にしてドイツ、フランス、スペインなどより広大なる面積を有つこととなった。又諸君が演説なり文章なりで思想を伝へ得る範囲が、急に一千万人も拡がったのである。今能登の北端の岬の処に中心を置き、百八十里ほどの半径で以て円を描けば、北海道と九州と朝鮮が入り、丁度鴨緑江が境界になる。更に、北緯四十度東経百三十五度の辺に中心を移し、三百八十里ほどの半径で以て描けば、遼東半島、南満洲が入り、樺太も丁度北緯五十度の処まで入る。更に少し中心を転じ三百八十里ほどの半径にすれば、

この新渡戸演説は威風堂々たる朝鮮併合肯定論であり、それに堅く続行するところの膨張・侵略を客観視・合理化するところの日本民族進出論・日本植民地拡大論・日本大国(帝国)発展論である。¹⁵⁾

と、新渡戸が朝鮮の植民化への熱烈な肯定論者であったことを指摘した。

そして、朝鮮旅行に先立つ前に収録された随想録に書かれている新渡戸の朝鮮観、

朝鮮民族は政治的本能が欠如し潜在的常識に乏しく知識的野心が無いという資質をもっているから、このような薄弱な女性的国民は日本人の重荷となっている、したがって、日本は朝鮮という死せる国を復活せしめるため植民地経営に邁進しなければならない。¹⁶⁾

を紹介し、さらに、新渡戸が朝鮮併合前に新渡戸が全羅北道全州に旅し執筆した「枯死国朝鮮」というエッセイを紹介した。そこに、新渡戸は、収穫期の朝鮮農民の生き生きした労働の一端を活写してその牧歌的質朴さを認めながらも、結果として、

「朝鮮の衰亡の罪を期すべき所は、其国の気候にも非らず、又た其の土壤にも非らず。……凡ての罪惡は彼によって生ず」。「此国民の相貌と云ひ、生活の状態と云ひ、頗る温和、樸屋且つ原始的にして、彼等は第二十世紀、第十世紀の民に非らず。否な第一世紀の民にだもあらずして、彼等は有史前紀に属するものなり」。「韓人生活の習風は、死の習風なり。彼等は民族生活の期限を了りつゝあり。彼等が国民的生活の進路は殆んど過ぎたり。死は乃ち此半島を支配す」。¹⁷⁾

と、朝鮮が停滞している状況をもたらした最大の要因が朝鮮民族の頹廢的資質にあると強調していることを、田中慎一氏は指摘した。即ち、新渡戸の朝鮮植民化に対する肯定論は、朝鮮の「停滞」性はその民族の劣等性によるもので、朝鮮を発展させるためには植民地経営化しかないということである。¹⁸⁾

このような考えの持ち主だからこそ新渡戸は、かつて韓国総督であった伊藤博文に会っ

ハルビンは勿論北満洲、チチハル迄も円内に入つてしまふ。我々は之で何も土地を侵略しようなどといふ考はないのであるが、事實は事實として拡がるものである。(田中慎一(1983)「新渡戸稲造と朝鮮」『季刊三千里』34号、三千里社、pp.93-94)

15) 田中慎一(1983)「新渡戸稲造と朝鮮」『季刊三千里』34号、三千里社、p.94

16) 上掲書、p.95

17) 上掲書、p.95

18) 上掲書、p.95

た時、自らの「日本人の朝鮮への移住政策」を、伊藤が「朝鮮民族は自ら発展しうる民族だ」と反対した時、「(朝鮮人は自ら発展できない民族だから)日本人の移植が必要だ」として力説して譲らなかったのである。¹⁹⁾また、新渡戸は教育者として知られているが、彼が主として行った講義は植民地講義であったことを忘れてはならない。²⁰⁾つまり、彼の講義の主題は、「停滞」民族を日本の啓蒙によっていかに発展させるかであった。

先に述べた新渡戸稲造の言葉「私は太平洋の橋になりたい」は欧米との平等と繁栄を述べたものにしか過ぎず、そこには朝鮮の国家としての独立した繁栄は描かれていない。朝鮮人に対する「深い愛情」は民族間の平等の上にとったのではなく、不幸な「停滞」民族に対する「愛情」ではなく「哀情」であったろう。

2.2 福沢諭吉

福沢諭吉は一万円札のモデルになるほど、今も日本人から絶対的な尊敬を得ており、そして今も、彼の「脱亜論」は日本人の対外観に絶対的な影響力を与えている。

福沢は、1881年以来援助してきた金玉均ら開化派のクーデターが失敗に終わると、それまで主張していた「連帯論」を一擲し、「脱亜論」²¹⁾を『時事新報』²²⁾(1885年3月19日付け)に発

19) 岩波講座(1993)『近代日本と植民地4 統合と支配の理論』p.191

20) 前掲書、田中慎一(1983)、pp.89-91

21) 「脱亜論」の後半の部分：輔車唇齒とは隣国相助くるの喩えなれども、今の支那朝鮮はわが日本国のために一毫の援助とならざるのみならず、西洋文明人の眼をもつてすれば、三国の地利相接するがために、時にあるいはこれを同一視し、支韓を評するの価をもつてわが日本に命じるの意味なきにあらず。たとえば支那朝鮮の政府が古風の専制にして法律の恃むべきものあらざれば、西洋の人は日本もまた無法律の国かと疑い、支那朝鮮の土人が惑溺深くして科学の何たるを知らざれば、西洋の学者は日本も陰陽五行の国かと思ひ、支那人が卑屈にして恥を知らざれば、日本人の義侠これがために掩われ、朝鮮国に人を刑するの残酷なるあれば、日本人もまた無情なるかと推量せらるるがごとき、これらの事例を計れば枚挙に遑あらず。これを喩えば比隣軒を並べたる一村一町内の者どもが、愚かにして無法にしてしかも残忍無情なるときは、稀にその町村内の一家人が正当の人事に注意するも、他の魂に掩われて埋没するものに異ならず。その影響の事実に見られて、間接にわが外交上の故障をなすことは実に少々ならず、わが日本国の一大不幸というべし。されば今日の謀をなすに、わが国は隣国の開明を待つて共にアジアを興すの猶予あるべからず、むしろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接する法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するの風に従つて処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。われは心においてアジア東方の悪友を謝絶するものなり」(竹内好編『現代日本思想大系9 アジア主義』筑摩書房刊(光岡玄(1983)「福沢諭吉の国権論・アジア論」『季刊三千里』34号、三千里社、p.42より二次引用)

22) 時事新報(じじしんぼう)は、かつて存在した日本の日刊新聞である。1882年(明治15年)3月1日、福澤諭吉の手により創刊。その後、慶應義塾大学及びその出身者が全面協力して運営した。戦前の五大

表した。この「脱亜論」の趣旨を、光岡玄氏は『季刊三千里』(34号)「福沢諭吉の国権論・アジア論」で要約し、

これまで連帯をはかってきた中国、朝鮮の文明は固陋で、停滞、無気力、野蛮を脱却できず、国家の独立を保つ唯一のもの、西洋文明に移って「近代化」の道を進むことはできない。このまま推移すれば、中国、朝鮮は数年をへずして、亡国となり、世界文明諸国に分割される運命にある。両国の近隣にあるというかわり、それと等質のものだと誤解されることは、わが国にとって不幸である。今日の緊迫した国際情勢下では、両国の開明をまって、連帯してアジアを興すといった余裕はとうていない。このさい連帯のスクラムからはなれて、先進列強と行動をともにし、そのやり方にならって、両国にのぞむべきというのが、その趣旨である。²³⁾

と、述べている。さらに、光岡玄氏は旗田魏が「脱亜論」に対し言った「文明の名による侵略の肯定であり、その基礎には朝鮮は自ら文明化しえないという考えがある。これでは開化派への援助も、結局は日本の朝鮮支配の手段とならざるをえない」(「日本人の朝鮮観」『アジア・アフリカ講座 第三巻』勁草書房刊)²⁴⁾を紹介し、さらに、「脱亜論」と前後して『時事新報』に記載した福沢諭吉の「朝鮮人民のために其国の滅亡を賀す」という論文に「他国政府に亡ぼされるときは、亡国の民にして甚だ楽しまずと雖ども、前途に望みなき苦界に沈没して終身内外の恥辱中に死せんよりも、寧ろ強大文明国の保護を被り、せめて生命と私有とのみにてても安全にするは不幸中の幸ならん」と述べていることを挙げ、この「脱亜論」が朝鮮支配の必然性を朝鮮停滞論を根拠に訴えていることを、『季刊三千里』において、光岡玄氏は指摘した。²⁵⁾

しかし、「脱亜論」は、清日戦争後「アジア盟主論」が台頭することによって、その使命を全うしたと言われている。それに対し光岡玄氏は、

たしかに福沢の「脱亜論」だけとり上げれば、その指摘は妥当性をもっているように思われる。しかし、これまで見てきたように、日本近代化の進展と国際環境の変化とともに、いわば本質を変えず、「後進弱国」的国論、悪しき連帯論、そしてアジアとの連帯を拒否する「脱亜論」として表現形式を変転させるのが福沢諭吉の思想のあり方である。²⁶⁾

新聞の一つ。創刊に当たって「我日本国の独立を重んじて、畢生の目的、唯国権の一点に在る」と宣言した。現在も会社組織(株式会社時事新報社)としては存続している。

23) 前掲書、光岡玄、pp.41-42

24) 上掲書、p.42 からの二次引用

25) 上掲書、p.43

光岡玄氏は、福沢の思想は、「後進弱国」としての国権論→悪しき連帯論→脱亜論→亜細亜盟主論との表現形式を変え生き続けており、さらに現在においても有効性をもっている、と指摘した。ここで、光岡玄氏が述べた「本質」とは、「朝鮮停滞論」であることは、改めて言うまでもないであろう。悪しき連帯論の「悪しき」は朝鮮・中国が「停滞」であるからで、このため連帯を諦め「脱亜論」となり、他のアジアの国が「停滞」であるのでそれを「正しく導く」ために「アジアの盟主」となり、さらに日本を中心とする「大東亜」へと続くのである。

現在の日本人が「日本もアジアの一員である」をアジアに向けて常に発信するが、裏を返せばそれだけ自分達がアジアとは異なる、即ち、自分達は先進国欧米の一員であるという考えが強いことが伺える。第二次大戦敗戦後いち早く復興を遂げ唯一アジアにおける先進国となり、「後進性」の高いアジアとは距離を置いた。これは「脱亜論」が出された明治初期と同じ状況で、自分達は停滞したアジアとは異なるという考えが日本人一般に広く行き渡っている。即ち、この「脱亜論」も「停滞論」を根拠として形成されたものである。

さらに、李煜衡氏は、『季刊三千里』(5号)に「福沢諭吉の朝鮮政略について」という論文を発表し、

『学問のすすめ』に裏付けされた「国家平等観」に不可欠な日本の「独立」の対象となったのは、「我日本は欧米諸国に対して並立の権をとり、欧米諸国を制するの勢を得るに非ざれば、真の独立と言ふ可らず」とのべているように欧米諸国であり、東洋諸国に対しては、「我日本は亜細亜の諸国に対して和戦共に国の榮辱に差響くことなし。永遠の事を心配するときは、戦て之に勝つも却て国の独立に害ありと云はざる得ず」と述べて、当初から日本の独立如何とは関係なく、特に朝鮮に対しては、「国家平等観」の前提であった道理をも解せない相手としてその対象外としたのである。従って福沢のいう「国家平等観」は欧米諸国との関係を前提とするものであって、朝鮮をはじめ東洋諸国に対しては、依然として日本＝進歩・東洋＝停滞という図式しかなく、「国家平等観」の対象から除外されていたのである。²⁷⁾

と、『学問のすすめ』に裏付けされた「国家平等観」から朝鮮はその「停滞」性ゆえ除外された、と指摘した。ここで福沢の朝鮮観がどうであったか。福沢の朝鮮観は、『時事新報』などに顕著に記載されており、日本の「強大」「文明開化」「清潔」という性格に対し、朝鮮を「弱

26) 上掲書、p.43

27) 李煜衡(1976)「福沢諭吉の朝鮮政略について」『季刊三千里』5号、三千里社、pp.200-201

小)「未開化」「不潔」な性格であるとし、全般にわたって「頑愚頑民」「野蛮」などの言葉さえ使われている。福沢の朝鮮観は、端的に言って「固陋不明」つまり「朝鮮停滞論」である、と李煜衡は指摘した。²⁸⁾

このような福沢の朝鮮観はいつ形成されたのか。福沢は、1882年に李東仁・魚允中などの開化派の人物と交わっており、また、慶応義塾に在学していた朝鮮人留学生達ともかなりの接触があったことは想像に難くない。しかし、福沢の朝鮮観は朝鮮・朝鮮人に接する前から形成されていることを、李煜衡氏は『季刊三千里』において指摘した。それは、1875年10月に発表された「亜細亜諸国との和戦は我榮辱に関するなきの説」(『福沢諭吉全集』21巻所収)や、1877年2月の「朝鮮は退歩にあらずして停滞なるの説」(『福沢諭吉全集』19巻所収)により端的に記されている、とその内容を挙げ李煜衡氏は、

「亜細亜諸国との和戦は我榮辱に関するなきの説」は「征韓論」に対する主張であるが、この論中で福沢はしばしば朝鮮に対して、「野蛮」「道理を述べて解すること能わざる相手」或は「亜細亜洲中の一野蛮国」という表現をもって形容している。また、「朝鮮は退歩にあらずして停滞論なるの説」によれば、豊臣秀吉の朝鮮出兵以来、江華島事件にいたるまでの日本と朝鮮の差異は、日本の進歩、朝鮮の退歩という関係でなく、朝鮮が「悉く是れ二千二百五十年代(=西暦1500年代)の旧物を改めない」から、すなわち、日本の進歩に対する朝鮮の停滞という関係に起因しているという。このように、福沢は1882年以前に「朝鮮社会停滞論」を唱えていたのである。

また、その時期にかれが朝鮮人と接触した事実はなく、したがってかれの朝鮮(人)観は朝鮮人と接触する以前にすでに形成されていたものであると考えられる。であるならば福沢諭吉の朝鮮(人)観は、現実の「朝鮮」と接触した結果認識されたものでなく、一方では非儒教的な文明観によって、他方では江戸末期以来の文献的認識によって、形成された観念的なものだったといえよう。²⁹⁾

と述べ、福沢の朝鮮観は、直接朝鮮・朝鮮人と接することによって得られたのではなく、文献的認識によって形成された観念的なものであった。即ち、朝鮮が「停滞」した国であることを前提として、福沢は自らの朝鮮観を形成していったのである。

28) 上掲書、p.199

29) 上掲書、pp.199-200

2.3 与謝野鉄幹

明治の歌人と謝野鉄幹は、1900年、東京新詩社を起し、その機関誌『明星』を創刊。この『明星』は、日本近代文学史上のいわゆる中期浪漫主義文学の舞台となって数々の近代詩人を生み出した。鉄幹は、また、自らの文学上の業績もさることながら、明星派の代表的詩人と謝野晶子の夫としても良く知られている。このように、鉄幹は文学界だけでなく広く日本人大衆に絶大なる影響力をもち、彼の朝鮮観も日本人大衆に大きな影響力を与えたことは想像に難くない。

檜野秀子氏は「与謝野鉄幹と朝鮮」という論文を『季刊三千里』(28号)に記載し、鉄幹の「から山に、桜を植えて、から人に、やまと男子の歌うたはせむ」という歌をあげ、

なんという歌であろうか。そこに日本人と同じ尊厳を有し、独自の風俗・慣習を有する人間がいることが、まるで見えていないのではあるまいか。……明治の国家主義はかくのごときものであった。そして現代のわれわれがこの心情を完全に止揚し得ているとはとても思えない。³⁰⁾

と述べている。そこに、当時の朝鮮やアジアに対する日本の心情の一典型を見ることができる。このような心情を鉄幹がもち得た理由として、檜野秀子氏は

与謝野礼厳(鉄幹の父)は、本願寺の僧として、勤王派、ことに京都における薩摩藩と深い交渉を持ったり、また北陸諸国に働きかけて軍用金を調達する働きもしている。当時の本願寺は、尊王-佐幕の対立が激化する中で、尊王派について朝廷を盛り立て、自宗派の勢力伸長を計らうとしたため、前述のような鉄幹の父の活動となったわけである。この父の影響を、後に国粹的志士たちと親交を結ぶ若い鉄幹の姿に見ることができる。³¹⁾

と鉄幹の生い立ちから述べた。さらに、成長した後、鉄幹は「浅香社」³²⁾で文筆活動を行う一方で、戦争賛美と国家主義的気風に満ち満ちていた二六新報社³³⁾に入社した。それは師・直文³⁴⁾の幹旋ではあったが、鉄幹自らもそうしたものに憧れるという素地があったため

30) 檜野秀子(1978)「与謝野鉄幹と朝鮮」『季刊三千里』28号、三千里社、p.219

31) 上掲書、p.211

32) 鉄幹が上京した翌年の1893年に出来。師・直文を囲む門下生の集まりで、和歌の創作を主要活動とした。

33) 1893年10月に日刊新聞『二六新報』を創刊したが、その後休刊を繰り返し、1940年9月に新聞の戦時統制が行われ廃刊となった。

だ、と檜野秀子氏は指摘した。

当時、金玉均暗殺事件を契機に、「朝鮮の独立を守る」と称して内政干渉に乗り込もうとした民間の志士のグループに「天佑侠」があった。二六新報社の社員にはこの天佑侠のメンバーが多かった。³⁵⁾二六新報社の社員で天佑侠の一員でもあった安達九郎が朝鮮に赴く時、鉄幹は「山けはし。駒の足おそし。行手にハ、竹の葉そよぎ、虎吼えむとす」³⁶⁾という歌を詠んだ。1894年日清戦争が始まるや国民の国家主義的感情を煽り立てるような詩歌が『二六新報』に盛んに掲載された。そして、それらのほとんどが鉄幹によるものであった。檜野秀子氏は、鉄幹が詠んだ一首、

大男児、死ぬべき時に死ぬを得バ捨つる命は惜しからず/五十年、太平の夢をむさぼりて/なにか空しく長らへむ/おもしろし、千載一遇このいくさ/大男児、死ぬべき時こそ来りけれ/けふきけバ、平壤のいくさも、勝てりとか/長駆して、こたびはつかむ奉天府/なにゆゑに剣ハまなびし/なにゆゑに書ハよみつる/かかる時用ゐむためぞ/かかる時死ぬべきためぞ/いざさらバ、世に思ひおく事もなし/我ハ唯だ行く戦場に(「従軍行」1894年8月21日作)³⁷⁾

を挙げ、そこには朝鮮の苦しみ・悲しみが微塵も表れていない、と指摘した。

鉄幹は、バイオロニズに感化されたとあるが。³⁸⁾イギリスの浪漫派詩人バイロン(1788-1824)は、若き時、島国イギリスを出て大陸を放浪し、その時の紀行詩文「チャイルドハロルドの旅」は奔放な詩風の異国情緒あふれるもので、当時大変な人気を博した。しかし、鉄幹の歌には朝鮮に縁のあるものが多いが、朝鮮的エキゾチズム、朝鮮の体臭が伝わってくるような歌が殆んどない。ただ、地名などを表す固有名詞や「韓」「韓山」「から人」などの語句から辛うじて朝鮮であることが分かるものばかりである。そして、朝鮮の地で日本人の奮闘を歌い上げたものが多いのに反し、朝鮮に関する歌は慨嘆詩がほとんどであった。³⁹⁾バイロンと同じように、鉄幹は島国を出て大陸(朝鮮)を放浪したが、朝鮮を見ることはなかった。

34) 鉄幹が師と仰いだ国文学者・落合直文。1861年12月16日-1903年、日本の歌人、国文学者。元の名は鮎貝盛光といい、朝鮮語学者の鮎貝房之進は実弟。門弟と謝野鉄幹の創始した「明星」には監修の協力や歌文を寄稿した。

35) 前掲書、檜野秀子、p.212

36) 上掲書、p.212

37) 上掲書、p.212

38) 笹淵友一(1985/1973)『「明星」派の文学運動』『日本文学研究資料叢書 近代短歌』有精堂、p.72

39) 前掲書、檜野秀子、p.212

鉄幹は反逆・抵抗の精神はなく、内面的葛藤のない楽天・自己満足主義者であった⁴⁰⁾と伝えられている。そのような鉄幹だから、朝鮮の植民地化を正当化する「朝鮮停滞論」をそのまま受入れ、朝鮮の「発展」のために尽力を尽くす日本人の姿を謳歌したのであろう。この時、当然のごとく朝鮮の苦しみや悲しみは彼の目に入らなかったのである。

高崎隆治氏は、『季刊三千里』(25号)に「文学にみる日本人の朝鮮人像」を載せ、

もっぱら昭和初期の短歌作品を通読した。通読と言うよりは、秀歌を発見するための探索で、総数にして約60万首ぐらい目に通した計算になる。しかも、そのほとんどは戦前・戦中の作品だから、当然のことながら植民地や占領地での作品も多く、朝鮮で刊行された歌誌や歌集も少なからず含まれていた。

ところで、結論を言ってしまうと、朝鮮または朝鮮人を主題とした作品(そのほとんどすべて日本人の作品だが)に、秀作とみなされるものは皆無にひとしい惨憺たる結果に終わってしまった。(略)つまり、朝鮮で刊行された歌誌・歌集にとって、なによりも必要とされなければならない朝鮮色がそれらにはきわめて希薄で。いったいこれはどこで詠まれた作なのか、どこで刊行された集なのかと疑わせるものがその大部分であったのだ。これは私にとってまったく意外であった。少なくとも「満州」での作は、そこに住む人々の生活や習慣や風俗が、日本人のそれとはまったく違った興味あるものとして捉えられていたし、日本人の目を通した中国人の姿がそこにはくっきりと写されていた。だが、朝鮮の自然を除けば、朝鮮を感じさせるものはなにひとつとして対象化されていないのである。⁴¹⁾

例として『朝鮮歌集』(1934年 朝鮮歌話会刊)をとれば、そこに収録されている73名の作品1200首の中に、朝鮮を対象として歌材に選んだものは、わずか30首にも満たない少数でしかないのだ。そこに、朝鮮の自然は詠まれていても、朝鮮人の風俗やその姿は不在である。⁴²⁾

と、述べている。朝鮮から選ばれた者は全て朝鮮在住の日本人であり、彼らには朝鮮が全く見えていないと言うより、見ようとしなかったと言うべきであろう。

朝鮮に居ても、日本での生活つまり日本での基準で生活し、朝鮮文化・朝鮮人の行動様式を理解しようとしなかった。即ち、朝鮮社会を停滞した社会と規定し、朝鮮文化・朝鮮人を野蛮な文化・野蛮な人と評価し、それを理解する価値を感じなかったのであろう。高崎隆治氏は、「文学に見る日本人の朝鮮人像」以前にも、『季刊三千里』に「日本文学者がとらえた朝鮮」(21号)⁴³⁾を掲載し、そこでも同じことを指摘している。

40) 前掲書、笹淵友一、p.72

41) 高崎隆治(1981)「文学に見る日本人の朝鮮人像」『季刊三千里』25号、p.53

42) 上掲書、p.54

さらに、評論家中野好夫は、『季刊三千里』に「徳富蘆花の朝鮮観」を寄稿し、そこに、当時の日本人の朝鮮に対する知識を徳富蘆花を例にあげ次のように述べている。

ただ一つ、蘆花のために弁明するとすれば、彼があんな根強い(親しみを持った)朝鮮での独立運動のことを、まったくといってもよいほど知らなかったことです。だからこそ、以上のようなたわけた発言⁴⁴⁾にもなったのでしょう。もっとも独立運動といえば、政府中枢一握りなどの要人たちならしらず、一般在野の日本人としては、嚴重を極めた報道統制ということもあり、ほとんど真実を知らなかったというのが実状でしょう。⁴⁵⁾

文学者の目をしててもこうであったので、朝鮮を併合するために創造された朝鮮観を一般の日本人が鵜呑みするのも無理はなかったと言える。

思想家でなかった鉄幹は、自らの朝鮮観を創造する術はなくただ当時の国粋主義に陶醉し、「停滞」した朝鮮を発展した日本が支配するしかないという思いを歌い上げ民衆を煽動した、といっても過言でないだろう。それは、理論的でなく感情的に訴えたので、民衆に与えた影響力は絶大であったであろう。

思想家としての福沢、教育者としての新渡戸、新人としての鉄幹たちによって、優秀民族日本・劣等民族朝鮮という公式が創り出され、「強大」「文明開化」「清潔」の日本が、「弱小」「未開化」「不潔」の朝鮮を保護・啓蒙しなければならぬという理論を日本の大衆に提供し、朝鮮の植民地化を正当化するとともに、朝鮮蔑視感情を増長した。これらを支えた理論の根本は、改めて言うまでもなく「朝鮮停滞論」であった。

ここでは誌面の問題から書き控えておくが、当時の社会主義者や宗教家の大多数にとっても、「停滞」した朝鮮は啓蒙の対象でしかなかったことも、『季刊三千里』において明らかにされている。⁴⁶⁾

43) 高崎隆治(1980)「日本文学者がとらえた朝鮮」『季刊三千里』21号、pp.54-59

44) 1921年に訪韓した後、「私と朝鮮」(『太平洋を中心にして』所収)に、彼自身「私の朝鮮観がすっかり変って居るにわれながら驚いて了うた」と言う通り、これはもうとてもお恥ずかしい代物、とうていおすすめできません、確かに「朝鮮も独立せねばならぬ」などと書いていますが、論理はまったくのメチャクチャで、半ば併合を肯定する形さえになっています。「日本に愛が出てくると、朝鮮にも愛が出て来た」だの、京城に大学ができるからといって「日本も大分朝鮮を愛しはじめた」だのとまで言い出す始末です。(中野好夫(1981)「徳富蘆花の朝鮮観」『季刊三千里』13号、p.71)

45) 前掲書、高崎隆治、p.71

46) 社会主義者に対する論文として飛鳥井雅道「明治社会主義者と朝鮮そして中国」『季刊三千里』(13号)、西重信「幸徳秋水」『季刊三千里』(17号)、西坂浩一「飛鳥井氏の反論を期待」『季刊三千里』(18号)、飛鳥井雅道「再論・幸徳秋水と朝鮮」『季刊三千里』(20号)、石坂浩一「社会主義者の朝鮮観」『季刊三千里』(34号)など、また、宗教家に対する論文として澤正彦「植村正久の朝鮮観」『季刊三千里』(34号)、森山浩

3. 日帝強占期の朝鮮「停滞論」創造

3.1 「征韓」の理論としての「停滞論」

古代から江戸時代に至るまで、一般的に日本人には「朝鮮停滞観」はなく、むしろ文化的にも朝鮮を上位国として考えていた。進んで大陸文化を受入れ、渡来人を歓んで迎えいていた古代は言うまでもなく、鎖国をしていた江戸時代でさえ朝鮮通信使から先進文化を学ぼうと多くの日本の学者達は通信使の宿舎に先を争って尋ねていた。⁴⁷⁾しかし、「征韓」という意識は古代からあった。

この「征韓」に関して、『季刊三千里』において上田正昭は、

神功皇后像の日本思想史上における役割は、予想以上に深くそして広い。そのゆがみの出発点は『日本書紀』の歪曲された朝鮮像にあった。『日本書紀』の巻第九の内容を受け、『万葉集』『続日本書紀』『延喜式』『懷風藻』などにも神功皇后征討説があげられていることから、古代の支配層の意識のなかに強くあったことが伺えると、早くも古代の支配層の「征韓論」を合理化するでたととなった。⁴⁸⁾

と、『日本書紀』(巻第九)に掲載されている気長足姫尊(神功皇后)の巻における所謂「三韓征伐」を根拠とするものであることを指摘した。『日本書紀』には「三韓征伐」という語はない、この言葉自体は後の造語である。確かに、新羅・高句麗・百済を「いわゆる三韓なり」と称して、新羅のみならず高句麗や百済もまた「親征」によって服属したかのように叙述されている。しかし、この「確かに」は史実という意味ではない。つまり、神話の世界であり、事実としての歴史ではない。『日本書紀』が書かれた時に、求められた歴史、即ち、『日本書紀』が創造した歴史である。

『日本書紀』の古代史は中国を中心とする世界において自国の地位を保障するために創造された古代史で、それは『日本書紀』の古代史であって、史実でないことは既に証明されている。特に、大和朝廷は、韓半島に対して自分達の優位を主張することによって、対外的

二「内村鑑三と朝鮮のキリスト教」などの多くの論文が掲載されており、そこには朝鮮の停滞観が蔓延している。

47) これに関して『季刊三千里』は、創刊号から6号まで李進熙の「通信使の道をゆく」、さらに森崎蘭外「朝鮮通信使と漢詩」(7号)角田豊正「朝鮮通信使と歌舞伎」(10号)などにおいて、述べている。

48) 上田正昭(1975)『「征韓論」とその思想』『季刊三千里』3号、三千里社、p.41

に自分たちの地位を保障しようとした。これが『日本書紀』の古代史である。⁴⁹⁾周知のように、大和朝廷は東アジア特に韓半島における優位な地位を確保するために、自ら進んで朝貢し爵位を受けたが、与えられた爵位は常に韓半島の三国よりも低いものであった。これではこれ以上中国の冊封体制の中に留まっている理由はなく、478年以後朝貢は中断された。⁵⁰⁾大和朝廷が韓半島を支配した史実は『日本書紀』にだけ残されているものであり、架空の史実『日本書紀』を根拠として「征韓」は成立している。即ち、この古代の「征韓論」は、政治的に創造された『日本書紀』の古代史であり、これがさらに大陸コンプレックスと結び付き延命してきたものである。

しかし、「征韓」が国学者の間で盛んに語られるようになるのは、朝鮮通信使が終わる1811年前後からであった。⁵¹⁾吉田松蔭の『幽因録』、佐藤信淵の『宇内混同秘策』も奇妙なことに「征韓」に結びつく。しかし、韓半島を知るすべもない彼らが、その根拠として挙げたのが、唯一『日本書紀』の「神功皇后出兵」であった。⁵²⁾さらに、この「征韓」は、「神功皇后出兵」と豊臣秀吉の「朝鮮征伐」がセットしてでてくる。「神功皇后出兵」を事実化する作業として、歴史的事実である豊臣秀吉の「朝鮮征伐」と絡ませたのである。この影響を受け、与謝野鉄幹も朝鮮に初めて渡る時、わざわざ大阪に立ち寄り豊臣秀吉の祠に参っている。

明治時代に入ると、西洋と対抗できる近代国家を築くため、また、失職した士族の活動の場としての植民地朝鮮が必要となり、「征韓」が強く台頭してきた。さらに、ロシアが韓半島と満州地域を掌握すれば、日本が危険にさらされるという「朝鮮半島短刀」論から韓半島への侵略が必須と考えられ、それを正当化する政策として「征韓論」が創造されてきた。

問題は、「征韓」つまり朝鮮支配の正当性を保障すべき理論である。朝鮮を植民地とする必然性、つまり、日本が朝鮮を保護さらに合併しなければならない理論として、周知の①

49) 神野志隆光(1999)『古事記と日本書紀』講談社現代新書、pp.157-162

50) 讃王が四三八年に宗朝から授与された爵位は「安東將軍」だったが、百済の余映(久爾辛)王は四二〇年に「鎮東大將軍」、高句麗の高璵(長寿)王は同じ年に「征東大將軍」が送られている。將軍号は、征東→鎮東→安東との順に地位が下がる。さらに「大將軍」号が贈られたのは、四七八年武王の時である。それに引き替え、四三六年高句麗の高璵(長寿)王に「開府儀同三司」が贈られている。「開府」とは幕府を開くことで、その資格があると公認されたことを意味するものである。当時まだ倭国の地位は国際的に低い位置にあったと言える。これを倭国王が納得するわけがなく、武王はこれに不満を持ち、「窃かに自ら開府儀同三司を仮す」と、中国がくれないものだから、自分で勝手に名乗っている。(朴正義(2001)「天皇を保障した『古事記』」『日本学報』46輯 韓国日本学会、pp.367-377)

51) 上田正昭・姜在彦(1981)「日本人の朝鮮観を考える」『季刊三千里』25号三千里社、pp.42-52

52) 上掲書、pp.42-52

朝鮮停滞論②朝鮮付備論③日鮮同祖論の三つの理論が創造され、さらにこれを支える理論として④「半島宿命論」が、日帝強占期に創造された。

これらの理論を簡単に整理すれば、朝鮮は独自に国を発展させる能力がなかった(①朝鮮停滞論)が、古代から二大国(中国・日本)に挟まれていた(④半島宿命論)ため常にこの二大国(中国・日本)に属し発展してきた(②朝鮮付備論)。しかし、中国はすでにその力がなく、さらに朝鮮は古代から天皇が治めた国であった(③日鮮同祖論)ので、必然的に日本が朝鮮を保護し発展させるためには併合するしかなかった(韓国併合)、ということになる。即ち、日本の理論は、朝鮮のために合併した、である。あらためて述べるまでもないが、これらの理論は戦後の社会学・政治学・歴史学の研究成果として、少なくとも①朝鮮停滞論を除き、すでに論破されている。①に関しては社会学・政治学・歴史学の立場からは論破されているが、まだ経済史学の立場から完全に論破されたとは言い難い、と『季刊三千里』は指摘した。これについては、後述することにする。

1910年、日本政府は大韓帝国を併合すると、翌11年8月23日、勅令第229号で第一次朝鮮教育令を公布した。天皇制教育の強制であるが、ここで注目すべきは朝鮮史教育が排除されたことである。歴史は日本史に限られ、朝鮮語及び漢文の教材でも「朝鮮地理の概要」のみを扱い、「朝鮮史」は無視された。⁵³⁾しかし、1919年の「三・一独立運動」以後、朝鮮の歴史を教えなかったため却って愛国史書が広く流布するようになったと判断し、日本の朝鮮植民地政策に適合するような朝鮮史を教え、従順な植民地民衆の形成をもくろんだ。この時、朝鮮史が、朝鮮停滞論・朝鮮付備論・日鮮同祖論をもとに作成されたことは言うまでもない。⁵⁴⁾この中でも主となったのは、「朝鮮停滞論」である。この「停滞論」によって、朝鮮民族=劣等民族、大和民族=優秀民族という構造が成立し、周知のような、朝鮮発展のための唯一の道が朝鮮が日本に組み込まれることであるとの朝鮮史が可能になるのである。

福沢・新渡戸にみられるように、初期の「停滞論」は、朝鮮末期における経済状態を欧米と比較し、その後進性から生まれたに過ぎなかった、と『季刊三千里』は指摘した。元来、停滞論は西洋人がアジアを侵略し植民地化する中で作りだしたアジア像であった。この中には日本も含まれていた。このため、日本は「脱亜」の道を歩み、さらに西洋人が作り出した停滞論でもってアジアに対する優越感をもち、アジア侵略の過程でアジアの停滞性を一層強調していったのである。

しかし、「朝鮮停滞論」は言葉だけが先行し、その理論化は後になされた。このため、朝

53) 前掲書、岩波講座『近代日本と植民地4』p.116

54) 上掲書、pp.117-118

鮮併合後、「停滞論」を実証する研究が盛に行われた、と言うより、朝鮮に関する研究は全て「停滞論」につきたと言っても過言でない。そして、この「停滞論」を経済史学から理論の体系化を行ったのが福田徳三であった。

3.2 「停滞論」の理論化

戦後の社会学・歴史学研究の成果によって、「日鮮同祖論」「朝鮮付傭論」はその理論的根拠は失い語られることはなくなったが、「停滞論」は今なお日本人の意識の中に生き続けている。『季刊三千里』(21号)において当時東海大学講師であった宮嶋博史氏は「日本人の朝鮮史研究と『停滞論』」において、

神話時代の昔から朝鮮が日本より文化的に遅れていたなどということを、真面目に論証しようとするような人はいない。(略)今日もなお根強く残っている「朝鮮社会停滞論」は、日本が朝鮮を植民地化しようとしていた時期、李朝末期以降、現在までの朝鮮社会のイメージに、主要な根拠を置いていると言ってもよいであろう。⁵⁵⁾

朝鮮「停滞論」は、西洋との比較からの朝鮮時代末期の経済的後進性を根拠に置いている、と指摘した。さらに、宮嶋博史氏は、福田徳三の「朝鮮停滞論」を説明し、

経済史的な発展段階論に基づいて、李朝末期の朝鮮社会の停滞性を主張した最初の人は、日本経済史学の開拓者の一人と言われる福田徳三であった。彼は1902年に朝鮮旅行をし、その際の見聞に基づいて、「韓国の経済組織と経済単位」という論文を発表した(『(法律学経済学)内外論叢』2-1、3-6、4-1)。この論文において彼はまず、ドイツの経済学者カール・ビュッヒャーの説に依拠しながら、人類の経済発展を、自足経済・都府経済・国民経済の三つの段階に分け、どの国の経済もこの普遍的な発展段階を経るものと想定する。そして韓国の社会が著しく後進的であるのは、朝鮮民族が特殊な性格を持っているためだとする当時の日本人の一般的理解を批判して、先の経済発展段階から朝鮮の後進性を理由づけている。すなわち朝鮮はいまだに自足経済=封建以前の段階にとどまっており、鎌倉幕府成立以降、都府経済=封建制の段階に進んだ日本の歴史に照らしてみても、藤原時代に相当すると指摘したのである。次いで彼は、朝鮮が封建制にまで達していない証拠として、土地所有における知行制の欠如と、人的関係における臣属関係の欠如の二点を上げる。すなわち、李朝時代の支配層であった両班は所領を持たず、また自分

55) 宮嶋博史(1980)「日本人の朝鮮史研究と『停滞論』」『季刊三千里』21号、p.49

に忠節を尽くしてくれる臣属というものを持っていないから、武士よりも公卿に近いとするのである。⁵⁶⁾

宮嶋博史氏に言わせると、福田の考えの最大の特徴は、朝鮮社会の停滞性の原因を、封建制の欠如に求めたことである。確かに、朝鮮(中国もそうであるが)の前近代史に、日本や西ヨーロッパのような意味での封建制が存在しなかったのは事実である。

これに対して、姜尚中氏は、『季刊三千里』(49号)「福田徳三の『朝鮮停滞史観』」において福田の説を、

日本の「封建制」を西欧の「封建制」に限りなく近づけようとする福田の「願望」は、土地の所有と人的紐帯の両面において日本の「封建制」が西欧のそれと全く同型であると断じて憚らない極論にまで突き進んでいるのである。日本の「封建制」は、西欧と同様、「恩給制」(勤務を代表とするレ・エン)と「従士制」の二つの特徴を備えていることになる。これに対して朝鮮の「両班」は、封建諸侯とは全く性格を異にし、所領地もなく、人的臣属の支えも欠ており、したがって規律正しいエーストと厳正な社会教育が未発達の状態にとどまったというわけである。『「荘園」と称し、『フロンホフ』と云ふもの之を今日にの韓国に見ず』、これが福田が朝鮮の現状に下した診断である。⁵⁷⁾

と述べた後、「停滞」する朝鮮をはじめとするアジアから日本を除外する根本理論である「日本=欧米」を批判して、

福田の見解が、「封建制」の歴史・社会的な規定の点でなお通説的な地位を失っていない、次のようなマックス・ウェーバーの類型論と比較しても無理があることは明らかであろう。すなわち、ウェーバーによれば、広義における「封建」関係は、(1)「ライトウルギ的」封建制、(2)「家産制的」封建制および(3)「自由な」封建制に分類さらにされ、(3)は三つの下位類型に整除される。その第一が、荘園領主権の授受を伴わない、もっぱら人的な誠実関係にもとづく「従士制的」封建制であり、第二は、これとは全く逆の関係にある「プレベンデ的」封建制があげられ、そして第三に人的誠実関係とレ・エンとが結合した「レ・エン的」封建制が考えられるに。西欧の「封建制」とは、この最後の「レ・エン的」封建制に他ならないことは言うまでもない。これに対して日本の「封建制」は、第一の「従士制的」封建制のタイプに属しているのである。したがって「純粹に人的な従士の恭順(ビエテ-ト)をもつ日本の封建制には、恩給制の荘園領主的構造が欠ていた」とする

56) 前掲書、宮嶋博史、p.50

57) 姜尚中(1987)「福田徳三の『朝鮮停滞史観』」『季刊三千里』49号、p.85

ウェーバの指摘からすれば、先の福田の日本封建制論がいかにも片手落ち(マ)であったかは明らかであろう。「欠落」(恩給制の欠如)を「存在」に置き換えようとする福田の虚構が、他方で朝鮮社会の一面のみをデフォルメした形で描き出されたことは言うまでもないであろう。それは朝鮮の研究から引きだした福田の「処方箋」のなかに、いわば「善意の」植民地支配への意志としてあらわれているのである。⁵⁸⁾

さらに続けて、姜尚中氏は、福田の朝鮮観を次のように述べている。

福田は、R・シュタムラの見解『唯物史観よりみたる経済と崩』(1896年)に触発されつつ、朝鮮の将来を次のように展望している。すなわち朝鮮の劣った国民的性格を改造するためには「有力有勢なる文明国民」と接触し、それに「同化」されるのが最善の道であり、その任に当たる最適の文明国は日本以外にありえないと言うのである。それはある意味で「資本の文明化作用」と楽天的とも思える同化論によって肯定化した見解であり、朝鮮の「独創の発展」と「自発性」ははじめから摘み取られているのである。福田が朝鮮の「併呑」にいかにも「文化的使命」を感じていたかは、論文「経済組織」の結論部分に吐露されている、独善的な倒錯した感慨に余すことなく表明されている。⁵⁹⁾

以上のように停滞論が植民地支配を美化する役割を果たしてきたことは明白である。そのため、その政治的意味を知ることに対して多くの研究が費されてきた。

しかし、宮嶋博史氏は、確かに、植民地支配に反対し、停滞論の政治的意味を問題にすることは大切であるが、それと同時に停滞論そのものを経済史学の面から批判し克服する作業が必要であると、述べ、

周知の如く、1945年以降の朝鮮史研究は、戦前の日本人研究者が打ち立てたドグマ的な朝鮮史像を批判し、新しい朝鮮史を創造する点で、多くの成果を上げてきた。しかし、福田が主張した、封建制欠如論に基づく「朝鮮社会停滞論」の克服は、なお十分な成果を収めていないように思われる。

福田説を完全に克服するためには、福田説の反証となるような個々の史実を明らかにするだけでは決定的に不十分であり、それに対置しうるような、体系的な朝鮮史像を明確にしなければならない。

こうした新しい朝鮮史像を創造していく際にもっとも重要な点は、直接生産者の歴史的発展

58) 上掲書、pp.85-86

59) 上掲書、p.86

の問題を究明することにあると思われる。それは言い換えるならば、封建制という歴史研究における基本概念の一つを、福田のいうように支配者(両班や武士)のあり方の問題としてではなく、何よりもまず農民の主体的発展の問題、奴隷から農奴への発展問題として捉えるべきことを意味する。戦後の研究は、高麗の印刷技術や李朝の白磁等、朝鮮文化の輝かしい伝統を明らかにしたが、そうした優れた文化を生み出した原動力としての民衆の日々の労働と生産における発展の問題は、まだ殆んど未解明である。民衆的視点を貫いた新しい朝鮮史像をつくりあげることこそが、「停滞論」の根本的克服のためには不可欠であり、そうした課題に我々は真剣に答えていかなければならないであろう。⁶⁰⁾

と、残念ながらの今も「停滞論」に対する確実な答えは得られていないと、「日本人の朝鮮史研究と『停滞論』」を締めくくった。

さらに問題は、「停滞論」に基づいた朝鮮蔑視観が、日本の敗戦によって終りを告げたのではなく、それが今も持続されていることを、『季刊三千里』は明らかにした。

4. 敗戦後も受け継がれた朝鮮「停滞論」

「朝鮮停滞」の理論は、日本の敗戦と共に終りを告げたのではない。『季刊三千里』(3号)において、当時の朝鮮史の第一人者であった旗田巍は、戦後まもない時期に出された調査報告書「日本人の海外活動に関する歴史的調査」をあげて、戦後も朝鮮を支配した必然性を支えた朝鮮「停滞論」は生き続けていると指摘した。この報告書は、大蔵省管理局の計画で編纂が敗戦後間もない時期に始まり1945年12月に完成したもので、全35冊+総目録1冊という膨大な報告書であった。特に、朝鮮編は第1総論編に続いて第2-11冊を占め、全体の中で大きな比重を占めている。⁶¹⁾これが作成された目的は、「連合国に対する賠償」および将来おこるとされる「国の個人に対する補償」の問題に備えたものであったことは、明らかである。

賠償に対処するためには、日本人の海外活動の性格が問題になる。この点に対し調査書は「これは侵略とか、掠奪とかという言葉で、一列に言ってのけられる取引の結果ではな

60) 前掲書、宮嶋博史、p.53

61) 小林英夫監修(2000)『日本人の海外活動に関する歴史的調査』(復刻版)全23巻(24分冊)ゆまに書房(紀伊國屋書店発売)

く、日本及び日本人の在外財産は、原則としては、多年の正常な経済活動の成果であった。……これは連合国に対する弁解という意図からでは勿論なく、吾々の子孫に残す教訓であり……」⁶²⁾。また「日本及び日本人の在外財産の生成過程は、言われるような帝国主義的發展史ではなく、国家或は民族の侵略史でもない。日本人の海外活動は、日本人固有の経済行為であり、商取引であり、文化活動であった」⁶³⁾(序による)と、日本および日本人の経済活動は侵略でなく、あくまでも正当なものであり、したがって賠償など要求されるべき筋合いのものではない、という結論を導くためのものである。

これに対し旗田巍は、「この調査書は、筆者の見解でなく、日本政府の見解でもあったにちがいない。さらに、その見解は、本書が作られた当時の、すなわち敗戦直後の日本政府の見解であっただけでなく、その後ずっと一貫して現在でも変わっていないと思う」⁶⁴⁾と述べている。

調査書は、韓半島は植民地になるべく運命であったと説明し、さらに日本の植民地政策は韓半島の発展に役立ったもので、決して他の植民地政策のように収奪ではなかった、と結論付けている。この根拠が、「朝鮮停滞論」であった、と旗田巍は『季刊三千里』「朝鮮政策と停滞論」(3号)で指摘した。

この調査書は「日本の朝鮮に対する関係は、普通の植民地なる観念を以てり律し得べからざるものであり、日本は所謂植民地支配、即ち彼は搾取の対象であり、本国及本国人の利益の為に統治され支配さるるものなりとの意図を以て彼に望むべきに非ずとなしたのである」⁶⁵⁾と述べている。そこに、朝鮮への植民地統治の根本方針は立派であった、植民地支配の正当性を主張したのである。次に、統治の内容として、政治・経済・社会・文化など、あらゆる分野について統治の実績を誇示し、その結論として、日本の統治時代に如何に発展したかを述べている。即ち、日本政府の立場は、日本の朝鮮支配は植民地支配でも、搾取でもなかった、である。

しかし、根本方針はどうであれ、実際の統治政策の歴史を見れば、明らかに搾取の対象であったことはここで改めて言うまでもない。さらに、日帝強占期に文化などあらゆる面において独自の発展が阻害され、いまでも日本の残像を消し去れずにいる。調査書のような朝鮮統治礼讃論を支える大きい論拠は、朝鮮時代の朝鮮の「停滞性」といえる。かつての朝

62) 旗田巍(1975)「朝鮮政策と停滞論」『季刊三千里』3号、三千里社、p.43

63) 上掲書、p.43

64) 上掲書、p.43

65) 上掲書、p.45

鮮が近代世界のなかで非常に立ち後れていたことを強調することによって、日本の統治下における朝鮮の向上をはっきりさせ、同時に日本の統治を美化しようとするものである。

調査書の朝鮮編の第1章は

旧来朝鮮社会の政治・経済・社会・文化の性格」と題し開港前の朝鮮社会の姿をえがいている。ここに「李朝500年間、いつの時代をとりあげても、同様の生活方式があり、同様の思考方式が支配し、生産方法の躍進もなく、消費生活の変化もなく、常に同様の批判が繰り返さるに拘らず反省も改革も行われなかった。常に両班は支配し常民は屈服し、常に朱子学は金科玉条であり、常に原始的農耕が行われ、常に国民は最低限の生活に満足させられた。斯かる醉生夢死的時間の経過を包括的象徴的に爾か名づけるのである。⁶⁶⁾

と述べている。そこに示された朝鮮の状態は「停滞性」という言葉であらわす以外に仕様の無いようなものであった。これに対し旗田巍は、

こういう停滞論は、日本の朝鮮に対する植民地支配を美化し合理化するのに役立つ考えであった。しかし、停滞論は本調査書の筆者だけがもっていたのではない。かつての日本人の朝鮮研究者が普通にいただいていた朝鮮認識であった。この調査書は、かつての日本人の朝鮮研究の蓄積を土台にして停滞論を主張しているのであって、その背後には明治・大正・昭和を通じての長年にわたる日本人の朝鮮研究の蓄積があった。かつての朝鮮研究者を思いだすと、まず全員が停滞論をもっていた。私自身も、そういう空気の中で育ったことを認めないわけにはいかない。多くの研究者が発掘したのは朝鮮社会の停滞性であり、それを見付け出すのに努力を重ねたといっても過言でない。これは実に根深い意識である。⁶⁷⁾

と、指摘した。

戦後すぐにこのような公文書がつくられたということは、敗戦後、現在に至るまで、日本政府の朝鮮植民地政策に対する認識は、変わっていないことを示すものである。韓日国交回復を目指した韓日会談での日本人側の首席代表である久保田貫一郎が日本の植民地政策を美化したいいわゆる「久保田発言」⁶⁸⁾などなど、上げればきりが無い。要するに、停滞していた朝鮮を日本の力で向上させた、というのである。そういう認識は現在でも根強く残っており、日本の朝鮮植民地政策に対する罪の意識は微塵もなく、さらにこれが今も朝

66) 上掲書、p.46

67) 上掲書、p.46

68) 高崎宗司(1966)『検証 日韓会談』岩波新書、pp.45-64

鮮人蔑視へ直結しているのである。過去においては、内心そう思っている公に口にする公人はいなかったが、現在は、元東京都知事の石原慎太郎のように公言⁶⁹⁾して憚らない者が急増している。寧ろ『季刊三千里』の時代より、退化していると言える。

現在の韓国の発展ぶりからも停滞論の基盤はくずれている。しかし、現実が変わっても意識は残っている。根強く植え付けられた日本人の朝鮮蔑視感情は、変わりそうにない。

『季刊三千里』(49号)において姜尚中氏は、

「停滞史観」は理論的意匠を凝らした「イデオロギー」に他ならないと述べている。それにもかかわらず、「停滞史観」はそれが全くイデオロギーとしてすらも自覚されることなく流布されていることである。一つのイデオロギーがその作為的な痕跡を完全に消し去り、ごく自然にありふれた「印象」として共有されるとき、それは疑いえない不動の「事実」にまで固定化されてしまうことになる。「停滞史観」がさまざまなヴァリエーションをとめないながら長らく命脈を保っていたのも、そうした経緯があるからである。⁷⁰⁾

と、「停滞論」はすでにイデオロギーでしかないが、「事実」として日本人の中に固定化されている、と指摘した。さらに、姜尚中氏は続けて、

「停滞史観」の論駁には朝鮮社会の歴史的事実、その経済的諸関係や政治制度、民衆の集団心性など、多岐にわたる歴史的事実の反証が必要なことは言うまでもない。しかしながら「停滞史観」が「史観」である限り、単なる個別的な事実の問題を越えた、いわばメタ歴史的なレベルの問題であることも事実である。実証的な事実をどんなに積分しても「史観」とはなりえないのである。その論駁には思想的・理論的批判の作業が不可欠である。⁷¹⁾

と述べ「福田徳三の『朝鮮停滞史観』(『季刊三千里』49号)を締めくくっている。この「停滞」というイデオロギーを歴史学的または政治学的だけでなく、宮嶋博史氏が言うように経済学史的にもキチッと論破しない限り、「停滞論」は将来にわたっても残り、韓半島の植民地化は必然的なものであったと歴史に刻まれ、朝鮮に対する過去の反省も、日本人の優越感情

69) 英国人記者から「知事は日本の朝鮮半島への行為を矮小化しているため開催地に選ばれるべきではないという、韓国での報道を知っているか」と問われて、「やっぱりヨーロッパの国によるアジアの植民地統治に比べてですね、日本の統治はむしろ非常に優しくて公平なものだったと朴大統領から聞きました」(2009年4月16日、国際オリンピック委員会(IOC)評価委員会の現地調査に関する記者会見で)

70) 前掲書、姜尚中、p.80

71) 前掲書、姜尚中、p.81

そして朝鮮蔑視感情もなくならないであろう。

5. おわりに

現在、日本で「嫌韓」感情が、日本人の韓国観に大きな影響を与えているが、これに対して韓国人の多くは疑問の念を抱くであろう。この「嫌韓」は、日帝強占期から受け継がれてきた日本人の朝鮮蔑視感情が表現を変え表出したものに過ぎない。日本は、古代より韓半島から多くの文物を受け入れ発展してきた。即ち、韓国は日本にとって「恩恵」の国であるはずである。それに反し日本は、倭と称していた時から海賊行為でもって常に韓半島沿岸を脅かしてきた。さらに、豊臣秀吉の侵略、近代に入ってから韓国合併など、歴史的に韓国に対し侵略行為を繰り返してきたといえる。韓国が日本を恨み嫌うことがあっても、嫌われる筋合いはないはずである。それにもかかわらず、日本人は韓国人を蔑視し、既に述べたように「嫌韓」感情が猛威を振るっている。この蔑視感情は、明治時代に創造された「朝鮮停滞論」「朝鮮付庸論」「日鮮同祖論」を基に育成されてきたことを、そのなかでも「停滞論」が主であったことを『季刊三千里』は明らかにしてきた。

新渡戸や福沢に代表される明治の知識人は、この「停滞論」に基づき、朝鮮の植民地化は必然的なものとして正当化した。しかし、新渡戸・福沢らの朝鮮「停滞論」は、直接朝鮮・朝鮮人に接する前に、文献的認識によって形成された観念的なものであった。つまり、「停滞論」は、朝鮮併合のシナリオのため作り上げられた朝鮮論であると、『季刊三千里』は指摘した。

それにもかかわらず、鉄幹のように当時の文学者は、この「停滞論」をそのまま受け入れ、「停滞」した朝鮮を発展させるため日本が支配することは歴史的使命であると、「日本の朝鮮併合は正義」であると歌い上げ民衆を煽動した。ここに、朝鮮併合は侵略でなく、あくまでも朝鮮を保護し発展させるために必然的なものであるとの理屈がまかり通ってきた。このため、現在に至るまで、日本政府、日本人は、朝鮮を植民地化したことへの罪意識はなく、当然それにたいする反省もない。むしろ、「停滞していた国を発展させてやったのだから、むしろ感謝しろ」と公の場で暴言を吐く者さえいる。「感謝しない韓国人」を嫌うという奇異な現象まで起きているのである。

さらに、日帝強占期の知識人によって創造された「停滞論」に基づく優秀民族日本VS劣等

民族朝鮮という公式は、文学者によって感情的に日本人大衆に伝えられ、日本人の「強大」「文明開化」「清潔」に対して、朝鮮人の「弱小」「未開化」「不潔」という認識を固定化し、日本人の朝鮮人蔑視感情を増長してきた、と『季刊三千里』は指摘した。

この「停滞論」は、日本の敗戦後にも改められることはなかった。戦後すぐに日本政府主導で編集された調査報告書『日本人の海外活動に関する歴史的調査』によってもみられるように、日本の朝鮮植民地政策を正当化するとともに、劣等民族朝鮮を固定化する理論として、「停滞論」を未来永劫に残そうと努力している。

古代から朝鮮独自の文化を築いてあげてきたことを考慮しなくても、解放後の朝鮮戦争によって国土はインフラが全て破壊されて日本以上の廃虚と化し、また、北朝鮮との対立の中で、さらに、アジアにおける市場が全て日本や先進国によって支配されていた状況下で、今日の経済発展を遂げたことを考えれば、独自の力によって近代国家を築き上げる能力がある民族であることは既に証明されているといえる。すでに朝鮮「停滞論」は終焉を迎えるべきであったにもかかわらず、朝鮮「停滞論」に基づく朝鮮蔑視感情は現在にまで至り、さらに「嫌韓」感情を表出させ大手を振ってまかり通っている。

姜尚中氏が言うように、「停滞論」はすでにイデオロギーでしかないが、「事実」として日本人の中に固定化されている。このためこのイデオロギーが、宮嶋博史氏が指摘したように、歴史学的または政治学的だけでなく、経済学史的にもキチッと論破されない限り、「停滞論」は将来にわたっても温存され、韓半島の植民地化は必然的なものであったと歴史に刻まれるだろう。そして、朝鮮に対する日本人の優越感情そして蔑視感情はなくなるまいであろう、と『季刊三千里』は指摘した。

今回の取り上げた問題と平行して『季刊三千里』が努力し続けたのは、日本人に韓国・朝鮮人を正しく伝えることであった。このため、韓国の文化・歴史そして韓国人を日本人に伝える努力を『季刊三千里』は惜しまなかった。終刊するまで誌面の半分以上を費やしたと言っても過言でないだろう。これは、同じ人間として、日本人に韓国人に対する「敬」の心をもたせるためである。

田中明氏は、『季刊三千里』創刊によせて、「『敬』と『偏見』と一『季刊三千里』創刊によせて」⁷²⁾という次のような記事を載せている。

偏見は「敬」の感情と逆比例して徐々に徐々に消去されていくものであって、特効薬で一挙に

72) 田中明(1975)「『敬』と『偏見』と一『季刊三千里』創刊によせて」『季刊三千里』創刊号、三千里社、pp.142-149

粉碎されるものではないと、小生が思い続けているのは、こうした経験に根ざしています。自分の経験を一般化するつもりはありませんが「蔑視をやめる」というのと「敬する」というのとは、似ているようで違うのではないのでしょうか。まして、日本人のいう「蔑視をやめろ」と「敬」との間には雲泥の差があります。

日本における朝鮮(人)論は、日本人の偏見(つまり朝鮮蔑視)打破に集中しています。だが、日本人の偏見を論の中心に据えている限り、日本人のワクを超えることは難しいのではないか、という疑問が小生にはあります。たとえば偏見というマイナスを百パーセント打破しえたとしても、その結実が朝鮮人にとってゼロであってもプラスにはなりませんまい。⁷³⁾

元々、差別を正当化・合理化するため蔑視感情が創造され、それが今も人々の行動を規制し、社会的差別は温存されてきた。確かに、人には能力差がある。それを人間の個人のレベルでなく人種・民族のレベルと消化したのが民族差別である。であるから、「同じ人間だから」といって「差別反対」をいくら声高に叫んでも、民族差別はなくなる。さらに、蔑視感情は「感情」であるため、それが創造された過程を説明しても、解消することができない。相手に対し「敬」の心をもつことによって、始めて蔑視感情はなくなるのである。ここで、誤解してもらっては因るのは、韓国人の優越性を日本人に植え付けろと言っているのではない。互いに「敬」の心をもった時、始めて平等な心を持ち得るのである。

次回、『季刊三千里』が語った「敬」の心について、報告することにする。

【参考文献】

- 朝日ジャーナル編(1975)『日本の思想家上』朝日新聞書
 朝日ジャーナル編(1975)『日本の思想家中』朝日新聞書
 朝日ジャーナル編(1975)『日本の思想家下』朝日新聞書
 岩波講座編集委員編(1993)『岩波講座 近代日本と植民地 4 統合と支配の理論』岩波書店
 上田正昭(1999)『講学アジアの中の日本古代史』朝日新聞社
 梶村秀樹著作集刊行委員会・編集委員会編(1993)『梶村秀樹著作集第三巻 近代朝鮮經濟論』明石書房
 神野志隆光(1999)『古事記と日本書紀』講談社現代新書
 小林英夫監修(2000)『日本人の海外活動に関する歴史的調査』(復刻版)全23巻(24分冊)ゆまに書房(紀伊國屋書店発売)
 高崎宗司(1966年)『検証 日韓会談』岩波新書
 日本文学研究資料刊行会編(1985/1973)『日本文学研究資料叢書 近』代短歌有精堂
 松本三之介(1994)『明治精神の構造』岩波書店
 安田浩一(2012)『ネットと愛国』講談社

73) 上掲書、p.146

姜在彦(1983)『日本による朝鮮支配の40年』大阪書籍

朴忠錫・渡辺浩編(2005)『韓国・日本・「西洋」—その交錯と思想変容—』慶応義塾出版会

朴正義(2014)『大久保コリアタウンの人たち』国書刊行会

『季刊三千里』創刊・2・3・4・5・6・7・10・12・13・17・18・20・21・25・28・29・34・40・49号、三千里社

논문투고일	: 2016년 06월 25일
심사개시일	: 2016년 07월 17일
1차 수정일	: 2016년 08월 01일
2차 수정일	: 2016년 08월 03일
게재확정일	: 2016년 08월 15일

 <要旨>

『季刊三千里』が語る日本人の朝鮮蔑視観
 - 日帝強占期に創造された「停滞論」を基に -

朴正義

日本人の朝鮮人に対する蔑視感情は、「停滞論」が基本であったことを『季刊三千里』は語り続けてきた。教育者新渡戸稲造の植民地経営の正当化、思想家福沢諭吉の「脱亜論」「盟主論」などすべて、「停滞論」をその理論の土台におき創造されたものである。

詩人と謝野鉄幹が朝鮮を見ずして朝鮮を歌っているように、新渡戸稲造や福沢諭吉の朝鮮観も朝鮮を見ずして創造されたものであることを、『季刊三千里』は明らかにした。即ち、日本の近代化にとって必要な植民地としてまず朝鮮があり、その次に朝鮮を植民地化する理論として、「停滞論」が創造されたのである。

明治の知識人は、この「停滞論」に基づいて優秀民族日本VS劣等民族朝鮮を公式化し、さらに、この公式は文学者によって感情的に日本人に伝えられ、日本人の「強大」「文明開化」「清潔」に対して、朝鮮人の「弱小」「未開化」「不潔」という認識が日本人のなかで固定化され、日本人の朝鮮人蔑視感情を増長してきた。

そして、この「停滞論」は、戦後編集された調査報告書『日本人の海外活動に関する歴史的調査』からも分かるように、日本の朝鮮植民地化を正当化するとともに、劣等民族朝鮮を固定化する理論として現在も生き続け、韓国・朝鮮人を蔑視する感情を支えてきた、と『季刊三千里』は語っている。

Outlook on Japanese Korea slight in “The Quarterly Sanzenri”
 - “The stagnation idea” which was created in the colony times -

Park, Jung-Wei

“The Quarterly Sanzenri” showed that “Stagnation theory” was basic as for the slight feelings for the Japanese Korean. Justification of the colony management of educator Inazo Nitobe, “Datsu-A Ron” “Leader theory” of thinker Yukichi Fukuzawa were created as the theoretical base by “Stagnation theory”.

Poet Tekkan Yosano sang Korea without looking at Korea. “The Quarterly Sanzenri” made clear that Inazo Nitobe and Yukichi Fukuzawa create the Korea theory without looking at Korea.

At first colony Korea was necessary, thereafter “Stagnation theory” was created as the theory that a colony made Korea for the modernization of Japan .

The formula called the Japanese superrace vs. the Korea inferiority race was made based on “Stagnation theory” by intellectuals of the Meiji, thereafter recognition called Japanese = “powerful” “Westernization” “cleanliness” Korean = “minority” “non-civilization” “dirtiness” was immobilized by a literary person telling this formula to the Japanese public emotionally and grew arrogant for Japanese Korean slight feelings.

Working papers “Historic investigation about the Japanese overseas activity” was edited in postwar period. It immobilizes inferior racial Korea with the justification of the Korea colony of Japan by “Stagnation theory”. “The Quarterly Sanzenri” tells that “Stagnation theory” supports feelings to despise a Korean now.